

信仰の土着化と ナショナリズムの 相関関係

OVERVIEW

- ・ ナショナリズムと宗教
- ・ ナショナリズムに対する神学的洞察
- ・ 世俗的ナショナリズムと宗教的ナショナリズム
- ・ 近代化と信仰の「土着化」
- ・ 総括
- ・ 応用的事例——「風の谷のナウシカ」

ナショナリズムと宗教

- ・ 近代化の産物としてのナショナリズム
 - ・ cf. 近代以前：日蓮『立正安国論』、国学、復古神道
- ・ 「**国民は想像されたものである**。というのは、いかに小さな国民であろうと、これを構成する人々は、その大多数の同胞を知ること、会うことも、あるいはかれらについて聞くこともなく、それでいてなお、ひとりひとり心の中には、**共同の聖餐**（コミュニオン）のイメージが生きているからである」（B.アンダーソン『想像の共同体』）。

ナショナリズムに対する神学的洞察

- ・ 「プロテスタント原理は、（中略）相対的な現実に対してなされる、いかなる絶対的な主張にも——それがたとえプロテスタント教会によってなされたとしても——抵抗する神聖かつ人間的なプロテストを含意している」（P. Tillich, *The Protestant Era*）。
- ・ 偶像崇拜の禁止（→**見えざる偶像崇拜**）

世俗的ナショナリズムと 宗教的ナショナリズム

「〔世俗的ナショナリズムと宗教は〕包括的な道徳秩序の枠組み、すなわちそれに所属する人々に**究極的な忠誠を命じる枠組み**を与えるという、倫理的な機能を果たす。（中略）ナショナリズムと宗教がもつ、**殉教と暴力に道徳的許可を与える力**ほどに、明確に忠誠の共通様式が現れているものは、他のどこにも存在しない」（M.ユルゲンスマイヤー『ナショナリズムの世俗性と宗教性』）。

近代化と信仰の「土着化」

- ・ 土着化（indigenization）とは？
 - ・ すべての外来宗教は、ホスト社会で土着化の課題に直面してきた。
 - ・ テキストとコンテキスト（文脈）の関係
- ・ 近代における土着化は、しばしばナショナリズムと結びついた。
 - ・ 日本仏教のような伝統宗教でさえ、「ナショナルなもの」への《再土着化》を求められた。

総括

- 近代における土着化
 - 人々が生きる生活の場としてのパトリア（郷土）に張っていた《具体的な》根を切断し、「想像の共同体」としての国家に対し、新たに《抽象的な》根を張り直すプロセス（→近代日本の「宗教」概念）
- ナショナリズムに対し批判的距離を取りながら、多様な宗教性を考慮するために
 - ナショナリズムや宗教概念に負わされていた超文脈的（trans-contextual）特性を相対化
- **intra**-contextual theology of religions
 - パトリア、民俗信仰、愛国心
- **inter**-contextual theology of religions
 - ナショナリズム、宗教復興運動（原理主義）

風の谷のナウシカ（1984）



「ナウシカ」の特徴

- キリスト教の終末論（黙示文学）やメシアニズムを日本文化に「土着化」
- 共通点：自己犠牲（死そして復活）
- 相違点：
 - 救世主（メシア）：男性ではなく女性。自然の「支配者」ではなく、自然の「友」。
 - 善悪の報いではなく、善悪の彼岸へ。

魂宿す人型ロボット

『朝日新聞』2010年1月8日、朝刊

3 機械と異界

アイドル・演劇：アニミズムと技術の融合

軽快なJポップののって、若い「5人の女性」が踊る。人間のバックダンサー4人を引き連れているのは、身長158センチ、体重43キログラムの「人型ロボット」P4C。通称「未夢」だ。両手を左右上下なめらかに動かし、小さくステップを踏む。アイドルの振り付けさながらに。昨年10月、都内で開かれた「デジタルコンテンツEXPO」。日本独自に進化した技術で「クール・ガラパゴス」と定義した展示会場のステーションだ。

「amazing(驚きだ)」「creepy(ぞっとする)」。動画投稿サイトにあげられた映像は、再生回数が100万回を超え、英語のコメントも多い。開発した独立行政法人、産業技術総合研究所の横井一仁ヒューマノイド研究グループ長は「フアッションショーのモデルなど、エンターテインメント分野で産業化したい」。約1カ月後、都内の劇場では顔の造作が人間そっくりの女性型ロボットと人間の俳優による「演劇」が上演された。演出した平田オリザさんは「圧倒的に世界最先端の表現。近いうちに海外で公演したい」と話した。

「アイドルロボットにロボット演劇、日本だけの研究でしよう」。公立はこだて未来大の松原仁教授(人工知能)は話す。もともとロボットは、「強制労働」を意味するチェコ語が語源。西洋では人間の代わりに労働力という趣が濃く、映画などではしばしば人間に敵対して描かれる。一方、鉄腕アトムやドラえもんに慣れた日本人は「仲間」のような親しみをもち、その洗礼を受けてか、技術的な難しさを顧みずに、人型ロボットを夢見る研究者は多い。

神を見る眼鏡

なぜ日本人はロボットと「共生」したがるのか。松原教授は「神に創造された人間が特権的に自然を支配する西洋的な世界観でなく、万物に魂が宿る価値観が背景にある」と分析する。いわゆる「八百万の神」「アニミズム(精霊信仰)」と呼べる思想は、今も日本で息づく。「ひこにゃん」「せんとくろん」……。動物や名産品を癒やし系マスコットにした「ゆるキャラ」は、観光振興など自治体に欠かせないものになった。

真宗大谷派(東本願寺)は、今年の宗祖親鸞の750回忌に合わせて、親鸞を模した獅子の「鸞恩くん」、勤行集の本に顔を描いた「あかほんくん」などを作った。着ぐるみが出向けば「かわいい」と子供が群がる。原始的な信仰とされるアニミズム的な存在を、理性宗教である仏教界もすんなり受け入れる、それが日本だ。さかのぼれば、平安時代の高僧、鳥羽僧正作で日本最古の漫画とされる「鳥獣人物戯画」にカエルの仏像、猿の僧侶がすでにいた。昨年のNHKドラマ「ゲゲゲの女房」でも、俳優とアニメの妖怪が「共演」した画面を視聴者は違和感なく見つけた。放送中の夏、観光地の熱海でも現実と仮想が混然としていた。名所「お宮の松」などに、スマートフォンカメラを向ける若者たち。液晶画面に映る風景には、恋愛ゲーム「ラブプラス」の美少女キャラクターが記念写真のように納まっていた。現実の風景にデジタル情報が連動する、AR(拡張現実)という先端技術が可能にした、実在しない「彼女」とのデートだ。

一体化の快感

「ガラパゴス」と揶揄され、工業大国の自信が揺らぐ日本。関西学院大の奥野卓司教授(情報人類学)は「かつて日本がもつくりで世界を席巻したのは、機械を単なる道具として人間の身体性の拡張とみなしがちな西洋とは違った工業製品を作ったからだ」と指摘する。まゆのように搭乗者を包み込む、コンパクトな自動車。音楽を携帯し、目に映る街の風景を変えたウォークマン。動物や妖怪と「共存」するように機械と一体化し、そこで生まれる心地よさを楽しみこそが、世界に評価されたゆえんというのだ。

奥野教授は言う。「『となりのトトロ』や『千と千尋の神隠し』など、人間と異形が共存するアニミズム的世界を描いた宮崎駿監督の映画は、今や世界中で人気だ。そうした思想をモノづくりに取り戻すことが、日本再生に必要な」(宮本茂頼)



コラージュ・寺島隆介 / The Asahi Shimbun

ガラパゴスの先へ

文化変調第6部

次回は10日朝刊に掲載する予定です。